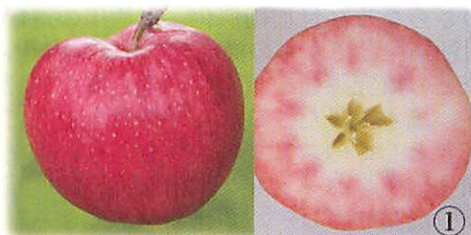




弘大農学生命科学部 同窓会会報

第35号

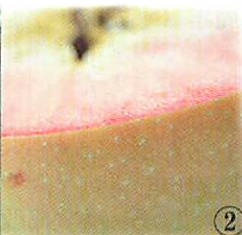
平成29年5月 発行
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会
TEL 0172-36-2111
FAX 0172-39-3750
振替 02340-7-564
印刷 (株) 笹 軽 印刷



新品種HFF33 (赤果皮赤肉)



新品種HFF60 (黄果皮赤肉)



新品種HFF63



雨よけして有機栽培に挑む



脚立不要の平棚栽培。技術確立を目指して試験中



微気象観測により蒸発散量や光合成量を解明



復元された試験場時代のガラス温室



ふじ生誕70周年記念碑と、結実が始まったふじ原木株分け樹



多くの来場者でにぎわうチューリップ園 (リンゴとチューリップのフェスティバル)



附属小学校3年生が毎年絵入りリンゴ作りに挑戦

写真で見る 藤崎農場の教育研究と地域連携

詳しくは4、5ページをご覧ください。



学部の地域貢献に向けた取組みは

同窓会長 一 戸 洋 次

農学生命科学部創立60周年（平成27年7月）の節目を経て、平成28年度末までの学部卒業生の総数は7,400名を超えるまでとなりました。

同窓生の皆様にはお元気でご活躍のことと心からお慶びを申し上げますとともに、同窓会へのご支援に対しましても深く感謝申し上げます。

さて、前号では平成28年度からの学部改組によって教育・研究の量的・質的な充実が図られ、地域貢献の進展に期待すると申し上げました。

同窓生の多くは、農業振興や食の高付加価値化、販路拡大など食の1～3次産業に何らかの関わりがあったり、住んでいる地域の発展、豊かな環境づくりに大きな関心を持たれていることと思います。

近年、首都圏へのヒト、カネの一極集中が進行している一方、地方では人口の減少、労働力の不足、地場産業の衰退などによって活力低下が顕在化していることから、若者が移り住み、働きたくなる地域づくりなど待ったなしの取組みが求められています。

そのような中で、地方創生に向けて大学の社会的役割がこれまで以上に期待され、重要視されていることから、母校の「地域連携・地域貢献」への取組みはいかに進められているか、触れてみたいと思います。

大学運営の基本方針である「弘前大学将来ビジョン」によると平成28年度から6年間の第3期中期目標期間では、大学改革を一層促進し、さらなる成果の社会還元を通じてイノベーション（技術・経営革新）の創出とそれを担う人材育成を図り、地域貢献のさらなる推進を目指すこととしています。

そのための第1の戦略として「アグリ（食）・ライフ（健康）・グリーン（再生可能エネルギー）分野における地域特性・資源を生かしたイノベーション創出と人材育成」を掲げています。

農学生命科学部が中心となる「食」の分野については、国際競争力のある青森ブランド食産業の創出・食の第6次産業化に向けた戦略の立案や学内の関係学部・機関をはじめ自治体、研究機関、企業との連携などといった研究の進行管理を担っている「地域イノベーション創出会議」を大学内に設置しています。

さらに学部内の「地域資源利活用研究センター」において、地域ニーズを踏まえ、外部研究機関・企業との共同研究の調整を図りながら地域を代表

する産物のさらなる高付加価値化、未活用の遺伝資源の有用性開発とそれらの商品化・ブランド化、販路開拓などの研究課題を設定し、重点的な研究を推進しています。また、これらの研究を通じて学生の技術者としてのスキルアップを図り、企業の競争力強化・イノベーション創出を担う高度技術者の育成や農業のグローバル化に対応できる経営能力を持つ人材育成にも努めています。

現在、進められている研究は、定期的に成果を発表し、関係者との情報共有を図りながら一日も早い実用化と経済波及を目指しているところです。

これまでの成果としては、長い歴史の中でその時代・地域の要請に対応した技術開発により課題解決に貢献してきましたが、最近では果肉の赤い「紅の夢」などりんご新品種の開発や加工・流通技術の開発、弘大白神酵母によるりんご酢・リンゴシードル・日本酒の開発、リンゴジュース搾り粕の有効利用による弘大アップルビーフ生産技術の開発などがあり、地元生産者や企業への技術移転により商品化、ブランド化につながっていると評価されます。

このように農学生命科学部に限らず全学を挙げて地域貢献を追究して「地（知）の拠点大学」を目指す弘前大学の存在は、地域や関連企業にとって大きな意義を持つものであり、同窓生としてもそれぞれの立場において大学との直接・間接的な関わりを生かし、連携していくことによってより多くの成果が得られるようになってほしいと思います。

同窓会としては、母校の発展を願い、可能な限り学部や学生の支援に努めていく一方、会員の高齢化が進む中でこれからの時代を担っていく若い世代の同窓会活動への参加が進むよう情報提供に努め、全体として会員相互の親睦・交流の輪が広がっていくようにと考えております。

このようなことから、会員の皆様には支部同窓会や地域・講座単位の同窓・同期の集いへの積極的な参加を期待するとともに、それらの状況や会員の活動などについての情報提供、会報への投稿も大いに歓迎いたします。

また、この会報は皆様の会費によって作られています。持続的な会の運営を図っていくためにも、引き続き皆様の格別のご理解・ご協力をお願いいたします。末筆ながら、皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げます。



卒業研究考察

農学生命科学部長 橋本 勝

同窓会の皆様には日ごろのご支援感謝申し上げます。学部長を仰せ付かって、約1年が経過しました。これまで実務を中心に活動してきた私にとって生活の大きな変革でした。学部を管理運営することの大変さを、身をもって体験しております。この1年、実験室に入る時間が少なくなり、研究室の学生さんには本当に申し訳なく思っております。同窓会誌寄稿という本機会をいただきましたので、卒業研究について考えてみました。

本学部4年生は、大学生活の最大イベントである卒業研究を行います。3年生からその助走を開始する学科もあるようです。卒業研究では新たなことに挑戦します。3年生までの学生実験では、実習効果を最大にしつつ講義時間中に終了するよう、あらかじめ検証が行われていることを考えると対照的です。卒業研究では望みどおりの結果をえるにはさまざまな工夫が必要です。簡単にはうまくいきません。長い実験の結果、自身の考えを否定する結果が得られることも少なくありません。研究のスパンで見ると、1年間という卒業研究はとても短く、世の中が驚くような研究成果というものは期待出来ないのも事実です。簡単に結果が得られない困難さゆえに研究にはロマンがあると思います。卒業研究のテーマは、社会やサイエンス全体から考えるきわめて狭い範囲といえます。教員は卒業研究で得た技術や知識が就職先で役に立つ進路を希望しますが、学生さんの進路は多様です。ましてや卒論テーマが直接活かせるケースは稀です。

では1年間の卒業研究に求められることは何でしょうか？私は、研究の過程で困難に直面し、3年間で勉強してきた知識や経験に基づきその原因を解析、そしてそれを乗り越えようとする体験が重要だと思います。卒業研究の場合、その成果は研究結果ではないと考えます。学生さんは希望す

る研究室にこだわりますが、私はさほど重要ではないと思うのです。社会に出て困難にぶつかった時、分野が異なっても卒業研究で体験したことは活かされると信じます。卒業研究の過程では指導教員と考え方が異なる場合があります。その場合、自身の考えを教員に説明して理解してもらう必要がありますが、このとき養われるプレゼンテーション能力が社会で役に立つと信じます。実習する学生さんは結果に頓着することなく取り組むことが大切だと思います。高校までは「効果的な学習」を言われてきたと思いますが、卒業研究は非効果的で構わないのです。思い通り行かない体験こそが重要です。結果につながらない体験が、自身の「引き出し」となります。また、1年間、大部分の時間を費やして一つのことに取り組むという点も、卒業研究でのみ体験できることであり、後に青春の大切な1ページになると信じています。(勿論、修士課程、博士課程と進むにつれ、プロフェッショナルとして結果の要素が大きくなります。)

学生さんとの年齢差が離れていくにつれ、いわゆる上から目線で指導してしまう自分に気づく今日この頃です。経験が感動を妨げてしまうのでしょうか？本寄稿を通じて、教員の私には当たり前でも初めて経験する学生にとっては感動するものはたくさんあることを忘れていないことに気づきました。一つ一つの実験で学生さんと一喜一憂を共有できるようすごしていきたいと考える次第です。

教員として発展途上を認識する良い機会となりました。紙面を借りて感謝します。

藤崎農場の教育研究と地域連携

農場主事・准教授 伊藤 大雄

藤崎農場は、1961年に農林省東北農業試験場園芸部の移転跡地の一部を譲り受けて開設されました。それから56年間、組織名称の変更はありましたが、農学部あるいは農学生命科学部の附属施設として、学部の教育研究活動の一翼を担ってきました。本稿では、藤崎農場の最近の活動を幅広く紹介します。

農場実習

2年生が履修する農場実習は、国際園芸農学科で通年の必修科目、地域環境工学科で前期の必修科目、生物学科で前期の選択科目となっています。また分子生命科学科と食料資源学科では、夏休みに3日間の集中実習を選択することができます。昭和60年(1985年)頃から学生の送迎に使われてきた学部のバスは数年前ついに役割を終え、民間のバス会社による送迎に変わりました。藤崎農場ではリンゴを中心にしつつも、出来るだけ多様な農業生産の現場を実体験してもらえるように実習を組み立てています。例えば野菜は実習用に10種類前後を栽培し、種まきに始まり間引き、移植、培土、除草等を経て収穫・出荷調整に至るまで、様々なメニューを用意しています。また数年前からトラクター実習を藤崎農場が担当しています。

研究

藤崎農場では塩崎・松本教員と藤田・佐藤早希技術職員らが中心になってリンゴの品種開発に取り組んできました。2010年には果肉まで赤くなる「紅の夢」を品種登録しました。果実表面に斑点が出来る障害を克服するため、また安定的に果肉を赤く着色させるため、品種登録後もこの品種に関する様々な研究を積み重ねています。

ところで、果肉を赤くする遺伝子は果皮を赤くする遺伝子とは異っており、日本で商業栽培されている主要品種は赤肉遺伝子を持っていません。「紅の夢」の赤肉遺伝子は、藤崎農場で長年保存されてきたある海外の品種に由来します。交配育

種を進める過程で偶然この品種の花粉が混入したために導入されたと考えられています。世界的品種「ふじ」を生み出した東北農業試験場から受け継いだと思われる遺伝資源が、弘前大学に思わぬ恩恵をもたらしたのです。

2016年には赤果皮赤肉の「HFF33」(表紙写真①)、黄果皮赤肉の「HFF60」(写真②)、そして普通の果肉色の「HFF63」(写真③)を品種登録しました。実は「HFF33」と「HFF60」も「紅の夢」同様偶然の産物で、その赤肉遺伝子は例の海外品種に由来すると考えられています。赤肉品種はまだ発展途上で、品種改良の余地が大いにあります。今後は上記の赤肉新品種を花粉親にして赤肉の実生を大量に作出し、更に優れた赤肉系統の選抜育成に努力する所存です。

藤崎農場では2004年から2013年まで、リンゴ圃場の一面を有機栽培区画とし、化学肥料や化学農薬を全く使用せずに様々な栽培試験を実施しました。リンゴを有機栽培するのは大変困難です。代替防除資材をどう使うのかが、当面成功の鍵を握ります。10年の間には何度か激甚な病害虫被害に遭いましたが、有機栽培で問題になる病害虫は何か、どんな代替防除資材がどの程度効くのか、知見を蓄積することが出来ました。また、雨よけ栽培すると病害が非常に抑制され、有機栽培でも慣行栽培に近い品質の果実を収穫することが出来ました(写真④)。

リンゴの平柵栽培も、藤崎農場で長年取り組んでいる課題です。平柵で栽培すると全ての作業で脚立が不要になり、作業能率が高まることが期待できます。第1期試験(2004~2012年、写真⑤)では、普通の台木を使用し、栽培管理を工夫して樹が強勢になり過ぎないように努力しましたが、花芽の確保が難しく収量はやや劣りました。しかし1個1個の果実は大きく、糖度も慣行栽培と遜色ありませんでした。現在矮性台木を使用して第2

期試験を実施中です。

リンゴ園上の複数の高さで温度・湿度・二酸化炭素濃度を正確に計ることにより、あるいは1高度でこれらを0.1秒以下の間隔で連続測定することにより、リンゴ園に出入りする水蒸気と二酸化炭素の量を明らかにすることが出来ます。ただしこの観測を実施するには圃場が広大でなくてはなりません。藤崎農場は隣接地までリンゴ園が広がり、この条件を満たすことから、10年間にわたって上記の観測に取り組んできました(写真⑥)。結果を解析すると、毎日の蒸発散量や光合成量、土壌有機物の分解量等がわかります。例えば、リンゴ樹は晴天日には午前9時頃まで一生懸命光合成しますが、以降日没まで光合成量がガラガラ低下することを突き止めました(他作物でも類似の現象があり、俗に昼寝現象と呼ばれています)。これから蓄積されたデータを解析して、栽培技術の改善に役立つ知見を得ると共に、気候変動下のリンゴ栽培についても考えてみたいと思います。

地域連携

藤崎町の町名にちなんで命名されたリンゴ「ふじ」は、現在世界一の栽培面積を誇ります。そのため藤崎町の人たちは「ふじ」を育成した東北農業試験場園芸部に強い敬意と愛着を持っています。弘前大学は「ふじ」生誕70周年にあたる2010年に、藤崎町の要望を受け止め、試験場時代の名残をとどめるものの老朽化して倒壊寸前となっていたガラス温室(1938年建築)を、当時の外観に修理復元しました(写真⑦)。さらにガラス温室の隣に記念碑を作り、「ふじ」原木株分け樹を植樹して(写真⑧)、この一画を「ふじのふるさと記念広場」として整備しました。

インターネットで「弘前大学藤崎農場チューリップ」を検索すると、美しいチューリップの写真に

たくさん行き着きます。藤崎農場では毎年、リンゴとチューリップが一斉に咲き揃う5月上中旬の週末2日間に「リンゴとチューリップのフェスティバル」を開催しており、ネット上のチューリップの写真は全て一般市民が撮影してアップしたものです。チューリップは、農場実習の学生達が植え付けから摘花、掘り取りまで世話をします。2004年から毎年実施していますが、大学の援助もあり今では地元の方に愛される大イベントに成長しました。2011年からは「ふじのふるさと記念広場」も併せて公開し、2014年にはテレビでも紹介されて、県外を含む3500名の来場者がありました(写真⑨)。今後もイベントの発展に努力し、積極的な情報発信の機会とする所存です。同窓会の皆様も是非お誘い合わせの上ご来場ください。

公開教育

生物共生教育研究センター主催の公開教育講座「リンゴを科学する」は、藤崎農場が中心となって企画運営しています。現在は平川市との共催で学部教員や関係者の協力も得て開催されており、リンゴ生産者を中心に毎年100~150名の参加者があります。また、公開講座「親子体験学習」は、農場教員等が講師になって小学生の親子25組が自然や農業にふれあう講座で、金木農場が中心となって企画運営していますが、藤崎農場もリンゴの摘果・収穫や昆虫採集の場を提供するなどして協力しています。さらに、附属小学校の総合学習にも協力しています。3年生は年に4回農場を訪れて、絵入りリンゴ作りに挑戦します(写真⑩)。2年生は9月に農場教職員の指導を受けながらプランターにチューリップを植え付けます。

今後とも同窓会の皆様の温かいご支援、ご鞭撻をお願いします。

事務局から

平成17-18年度総会で「弘前大学農学生命科学部同窓会における個人情報の取り扱いについて」が制定されました。支部会開催などで、会員情報が必要な際には「同窓生情報活用依頼書」を郵送またはファックスでお送り下さい。様式は会報第23号(2005年6月1日発行)の10ページにあります。

同窓会ホームページ(<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>)からもダウンロードできます。

白神キノコの会：発足の経緯と活動状況



白神キノコの会 会長 原田 幸雄

例年、大学祭（弘前大学総合文化祭）の期間中に農生校舎で白神キノコの会の紹介をしており立ち寄られる市民も多い。この展示室は本来白神自然環境研究所に割り当てられたもので、キノコの会はひさしを借りているわけである。展示品の目玉は会員が2日ばかりで手分けして近くの山野から採集してきたきのこ。写真パネルや乾燥標本の多い室内で生のきのこがずらりと並んでいるとひととき人目をひく。それぞれのきのこを通じて見学者と会員の会話がはずむ。

白神キノコの会の生いたちをふりかえってみる。2008年1月弘前大学農学生命科学部に白神研究センターが設置され、その友の会の一つとして2009年2月正式に発足した。その目的は、地域住民参加型の環境学習の場を設け白神山地及びその周辺に生息する菌類、とくにきのこ類の調査・研究を促進し、成果の発表・普及を図ることにあった。代表に原田が選出された。同年11月、青森県中津軽郡西目屋村川原平に弘前大学白神自然観察園が開園し、翌年には弘前大学白神自然環境研究所が設置され観察園はその附属施設となった。自然観察園にも友の会の制度ができたが個人登録制となっており、白神キノコの会と直接の関係はない。現在白神キノコ会の会員は約50名である。主な活動として①自然観察会、②きのこ栽培実習、③きのこ栽培施設見学、④勉強会、⑤成果の展示・公表などをあげることができる。

このうち自然観察会は活動の基本となるもので、シーズン中は月1回の野外調査を実施している。調査地は前述の白神自然観察園をフィールド（本拠地）と決め継続的に菌類調査を行う。ここは岩木川にそそぐ大沢川沿いの丘陵地に位置し敷地は約18ヘクタール、森林としては比較的限られた面積ながらミズナラやブナを主とする二次林、スギやカラマツの植林地など様々の林相をみることができ。また園内には比較のおおきな沢筋がいくつか走っており複雑な地形から変化にとんだ環境に恵まれている。その他の調査地とし



て観察園以遠の白神山地の森林（2か所）、津軽地方のいくつかの自然休養林などを順番にまわるのが恒例となっている。会の活動は事務局で詳しい記録を残している。設立後8年経過し2017年2月18日には第74回例会を終えた。この日の参加者は19名。うち6名が学生である。

発足後まもなく、会では弘大白神自然観察園内の菌類フロラ（発生するきのこの種類）を正確に把握することを活動目標の1つに掲げた。幸い白神自然環境研究所では自然観察の手引きとして写真パンフレットを逐一発行中だったので、そのシリーズにきのこを加えていただいた。原稿作成の過程では現地調査、写真撮影、キノコ種の同定など会員あげて協力した。これまで「白神自然観察園のきのこ（1～7）」（2011～2017）が発行された。各冊の掲載種は重複することなく、合計285種（変種）になった。これまでの調査で園内には予想以上に多種類のきのこの発生することが分かった。今後の調査でこの数はまだまだ増加すると思われる。

会員のなかには自然に生きづくきのこに魅せられ趣味として多年きのこ研究にとり組んでいる方も多い。彼らは野外調査の原動力であり観察会の主役となってきのこを見つけ素性をさぐる。そのすぐれた観察力に研究室育ちの会員は目をみはるばかりである。はじめて野外調査に参加する学生には得がたい経験となる。疑問の残るきのこは室内実験の得意な別の会員に渡される。このような連携プレーでこれまで当地方で一括してムキタケとよばれていたきのこがムキタケ（狭義）とオソムキタケ（新称）の2種からなることがわかった。また、会員が採集した未知のきのこのいくつかは学生の研究テーマとなっており、学界に報告すべき成果が蓄積されつつある。大学と地域住民との一致協力の賜物である。

最後に、弘前大学創立60周年記念事業の一環として設置された白神自然観察園を利用し会の活動を続けられることは真に有難く光栄である。会を代表して謝意を表する。
（弘前大学名誉教授）

平成28年度卒業生・修了生の祝賀会ならびに就職・進学先

平成29年3月23日に、平成28年度の農学生命科学部卒業証書授与式および大学院農学生命科学研究科の学位記授与式が行われた。今年度の学部卒業生は179名、大学院修士課程修了生は28名で、農学部と農学生命科学部をあわせた卒業生は7,475名、研究科修了生は1,066名となった。

雪の降るあいにくの天候のため、学部203多目的室にて記念写真撮影の後、学部・後援会・同窓会共催の祝賀会兼同窓会歓迎会が大学会館3階大ホールで行われ、恩師や友人との別れを惜しんだ。



卒業祝賀会の費用の一部が同窓会費で賄われています。また、学部卒業・大学院修了記念写真の費用は全額が同窓会費で賄われています。

本年度の卒業・修了生の就職先および進学先は以下の通りである（括弧内に数字を記入した場合以外は各1名である）。（平成29年3月28日現在）

生物学科

（株）イーブレイン、（株）札幌かに本家、（株）十文字チキンカンパニー、（株）小山内バッテリー社、（株）星野リゾート、イオン北海道（株）、新函館農業協同組合、岩手県職員（2）、北海道職員、青森県職員、埼玉県職員、福島県職員、弘前大学大学院（17）、横浜市立大学大学院、信州大学大学院、岐阜大学大学院、京都大学大学院、総合研究大学院大学

分子生命科学科

（株）OST札幌、（株）エスコ、（株）クリエイトエス・ディー、（株）コハタ、（株）セコマ、（株）テクノル、（株）ヤマチコーポレーション、（株）北海道銀行、SOC（株）、エムエルアイ・システムズ（株）、オハヨー乳業（株）、ヒロセ（株）、みやぎ生活協同組合、旭シンクロテック（株）、東奥信用金庫、独立行政法人農畜産業振興機構、日販コンピュータテクノロジー（株）、北海道公立学校、自衛隊、秋田県職員、福島県職員、弘前大学大学院（19）、東京大学大学院

生物資源学科

（株）あおもり健康企画、（株）オノヤ、（株）カインズ、（株）クリエイト・エス・ディー、（株）コサカ技研、（株）ハチカン、（株）進学会、NECソリューションイノベータ（株）、イビデングリーンテック（株）、サンポット（株）、ビジョンバイオ（株）、月島テクノメンテサービス（株）、十勝農業協同組合連合会、太子食品工業（株）、東京海上日動火災保険（株）、彦根さく泉（株）、自衛隊、酒田市職員、平川市職員、弘前大学大学院（5）、北海道大学大学院（5）、東北大学大学院（2）

園芸農学科

（株）サラダボウル、（株）ユニバース、（株）ライフフーズ、（株）七十七銀行、（株）日本水族館、JRAファシリティーズ（株）、オホーツク網走農業協同組合、つがる弘前農業協同組合、伊藤ハム販売（株）、有限会社ゆめりんご、工藤農園、高

梨乳業（株）、社会福祉法人わらしべ会、十勝農業協同組合連合会、雪印種苗（株）、全国農業協同組合連合会 千葉県本部、東日本旅客鉄道（株）、独立行政法人 農畜産業振興機構、秋田県公立学校、栃木県公立学校、青森県職員（3）、北海道職員（2）、東通村職員、小樽市職員、弘前大学大学院（5）、北海道大学大学院（2）

地域環境工学科

（株）TOKAIホールディングス、（株）鴻池組、（株）竹中土木、NTCコンサルタンツ（株）、ホクレン農業協同組合連合会、青森県土地改良団体連合、東亜グラウト工業（株）、内外エンジニアリング（株）、日本工営（株）、八戸農業協同組合、北王コンサルタント（株）、北海道旅客鉄道（株）（2）、和光技研（株）、防衛省施設局、青森県職員（2）、北海道職員、札幌市職員、函館市職員、東海村職員、宮城県職員、大館市職員、山形県職員、新潟県職員、弘前大学大学院（2）

<大学院農学生命科学研究科修了生>

生物学コース

（株）テクノ中部、（株）昭文社、共和ハーモテック（株）、北海道システム・サイエンス（株）、本坊酒造（株）、平川市職員、豊岡市職員

分子生命科学コース

（株）ワールドインテック、（株）医療システム研究所、WDBエウレカ（株）、イーエヌ大塚製薬（株）、カーリットホールディングス（株）、タマ化学工業（株）、合同酒精（株）、太子食品工業（株）

生物資源学コース

（株）フリーデン、一般財団法人日本食品分析センター、山本食品工業（株）、日糧製パン（株）、岩手大学大学院

園芸農学コース

（株）コロワイドMD、（株）サラダボウル、カネコ種苗（株）、一般社団法人日本海事検定協会、青森県職員

地域環境工学コース

一般社団法人 全国農業会議所、国土防災技術（株）

新任教員の自己紹介



岩井 邦久 教授（食料資源学科）

新設の食品科学コースに着任しました。

弘前を出て36年。仙台、横浜、青森と研究生活を送ってきましたが、恐らく最後の働く場を故郷に得られたことは望外の喜びであり、感慨を覚えます。

これまで、「地域食資源」「生理機能」「吸収・代謝」をキーワードに食品機能の研究をしてきました。本学でもその継続とともに、経験を伝え、食産業の人材育成と地域の振興に貢献できるよう努力する所存です。どうぞよろしく願いいたします。



成田 拓未 准教授（国際園芸農学科）

2016年5月付けで、国際マーケティング学分野准教授に着任しました。修士課程は弘前大学大学院農学研究科、博士課程は岩手大学大学院連合農学研究科（弘前大学配属）で学んだ同窓生です。大学院生

時代よりりんごの流通に関して研究してきました。りんごの海外輸出をはじめ、農産物のマーケティングが大きな研究課題となっています。本学で学んだことも活かして、教育・研究、社会貢献に励みたいと思います。



田中 克典 助教（食料資源学科）

本学の人文社会科学部を経て、10月1日付で農学生命科学部に着任しました。専門は植物育種学です。現生物種や考古資料を対象にして起源の解明や作物育種への利用を進めてきました。青森はイネを始め様々な農作物が生

産され大都市に供給している重要な生産拠点です。これまでの研究で培った人間関係と技術を生かしつつ、生産現場で抱えている課題に対して産学一体で取り組むことができると考えています。よろしく願いいたします。



正木 卓 助教（国際園芸農学科）

2016年12月1日付けで、農学生命科学部国際園芸農学科の助教に着任しました正木と申します。専門は農業経済学で、地域農業支援システムの確立とその有効性に関する研究や支援主体としての農協の事業展開のあり方に

ついて研究を行っています。東北地方での生活は初めてですが、東北の豊かな地域資源を活用した農山漁村の活性化の取り組みをもとに、教育・研究・社会貢献を進めていきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。



林 田 大 志 助教 (生物共生教育研究センター (藤崎農場))

2017年3月より生物共生教育研究センター藤崎農場に助教として着任致しました林田大志です。果樹園芸学を専門とし、ニホンナシの省力栽培の研究をしております。弘前大学ではニホンナシでの研究を活かし、

藤崎農場に栽植されているリンゴを中心に研究を行っていきたいと思います。また、前職の高知県立牧野植物園職員としての経験も活かし、様々な社会貢献および地域連携活動に取り組んでいきたいと考えております。色々ご迷惑をお掛けするとは思いますが、どうぞ宜しくお願い致します。

教職員人事

林田 大志 (はやしだ たいし)
助教(生物共生教育研究センター(藤崎農場))
平成29年3月16日

退職 (定年退職) 平成28年3月末日
退職教員無し

採用 (新任)
成田 拓未 (なりた たくみ)
准教授(国際園芸農学科) 平成28年5月1日
田中 克典 (たなか かつのり)
助教(食料資源学科) 平成28年10月1日
岩井 邦久 (いわい くにひさ)
教授(食料資源学科) 平成28年11月1日
正木 卓 (まさき すぐる)
助教(国際園芸農学科) 平成28年12月1日

(昇任)
泉谷 眞実 (いずみや まさみ)
教授(旧園芸農学科) 平成27年1月1日
藤崎 浩幸 (ふじさき ひろゆき)
教授(地域環境工学科) 平成27年4月1日
東 信行 (あずま のぶゆき)
教授(生物学科) 平成28年4月1日
殿内 暁夫 (とのうち あきお)
教授(分子生命科学科) 平成28年4月1日
前多 隼人 (まえだ はやと)
准教授(食料資源学科) 平成28年11月1日

会費納入と住所通知のお願い

平成29-30年度会費5,000円を、同封致しました振込用紙でお納め下さいますようお願い致します。転勤や転居で住所が変更になりましたら、事務局までご一報下さい。

同窓会事務局

〒036-8561 弘前市文京町3 弘前大学農学生命科学部同窓会
戸羽 隆宏 電話 0172-39-3786 E-mail ttakki@hirosaki-u.ac.jp
加藤 幸 電話 0172-39-3869 E-mail kato@hirosaki-u.ac.jp
濱田 茂樹 電話 0172-39-3772 E-mail shamada@hirosaki-u.ac.jp

訃報

正木 進 三 元教授・学部長 (応用昆虫学) 平成29年1月28日 御逝去 (享年89歳)
奥野 智 且 元教授 (生物化学) 平成29年4月4日 御逝去 (享年77歳)
木村 繁 昭 元助手 (農産製造学) 平成28年8月17日 御逝去

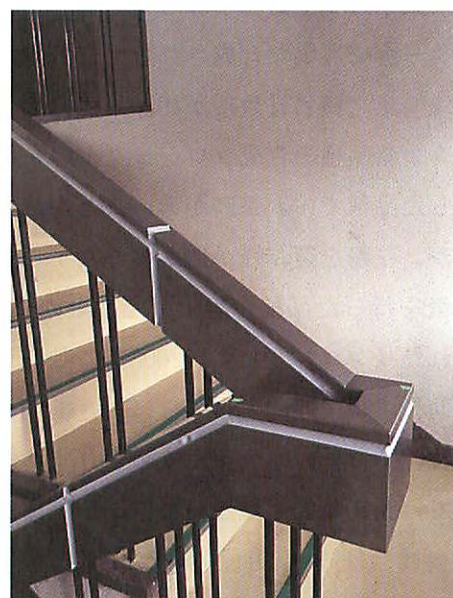
上記会員が逝去なさいました。謹んでご冥福をお祈り致します。

母校援助費で整備されました

同窓会では、学部建物および周辺の環境整備に役立てていただくことを目的として、会費収入の一部を学部に寄付しています。平成27・28年度は35万円を寄付しました。その一部を使って、階段の補修が行われました。



補修前



補修後

平成29-30年度同窓会総会開催のご案内

平成29-30年度総会を下記の通り開催致しますので、ご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

開催日時：平成29年7月1日（土）16時～17時

場所：菊富士本店（〒036-8016 青森県弘前市坂本町1）

電話：0172-36-3300

議題：

- 1 平成27-28年度事業報告
- 2 平成27-28年度会計報告
- 3 平成29-30年度事業計画
- 4 平成29-30年度予算
- 5 平成29-30年度役員
- 6 その他

なお、総会終了後に懇親会（会費3,000円）を行います。準備の都合がございますので、ご面倒ながら、ご出席下さる会員におかれましては、6月23日（金）までに、総務幹事戸羽（0172-39-3786 あるいは ttakki@hirosaki-u.ac.jp）に、ご芳名、ご卒業年、学科をご連絡下さいますようお願い申し上げます。

「紅の夢」普及推進委員会が弘前大学表彰受賞！

弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター藤崎農場で育成された「紅の夢」は、本学部塩崎雄之輔名誉教授が1980年代にスタートしたリンゴ新品種の育成プロジェクトの一環として誕生した品種です。果肉が赤いことが最大の特徴ですが、花粉を運ぶ蜂が何かのいたずらで偶然この特徴を持った品種が誕生したことから、「神様がくれたリンゴ」として、2008年に赴任した松本和浩助教（現・静岡大学）らに引き継がれ、その後の特性や育種の研究がすすめられました。弘前大学では2010年に品種登録し、2013年には地元の種苗会社（株）原田種苗）と販売許諾契約の締結に至り、苗木の販売が開始されています。

糖度が約13%、酸度約0.9%で程よい酸味があり、他の赤肉品種と比較して渋みがないことから生のまま食べられること、また、果肉の鮮やかなピンク色を生かした加工品等の開発が可能な点が特徴です。この特徴を生かしたジュースやジャム等は、一部で既に販売が開始されています。

「紅の夢」の普及にあたっては、地域の自治体

や企業等とともに『赤い果肉りんご「紅の夢」普及推進委員会』を組織して、栽培普及とブランド化を目指して活動を行ってきました。大学と地域が一体となって地域経済の振興に寄与する全国に先駆けた普及モデルとして注目され、農林水産省『フード・アクション・ニッポン アワード2014審査委員特別賞』の受賞をはじめとして、弘前大学が地域の主要産業の発展に積極的に貢献している姿勢が全国に知られるところとなりました。その成果は自治体・企業との新たな共同研究の締結に繋がり、ますます広がりをみせています。

このように、塩崎先生が進められてきた研究を引き継ぎ、さらに「紅の夢」普及推進委員会として大学と社会との連携、大学の研究成果の発信、といった活動が認められることとなり、今回、弘前大学表彰を受賞することとなりました。「紅の夢」の栽培普及には課題も多く、今後の研究の進展が待たれるところですが、今回の受賞を励みにして、今後も普及推進委員会を中心に活動を継続していきます。（文責：吉仲 怜）



表彰式の様子① 左・塩崎雄之輔名誉教授
右・松本和浩助教（当時）



表彰式の様子② 紅の夢普及推進委員会メンバー

同窓会だより

農業土木分野卒業生による
中部地区4県合同同窓会について

去る平成28年10月22日、長野県飯田市において農業土木コース卒業生による中部地区4県合同同窓会を開催しました。長野県での開催は平成22年以來で、なぜか御柱祭（7年に一度の奇祭で干支の申と寅の年に開催）の年に幹事が回って来ております。前回は諏訪市の諏訪湖初島の小宮で開催された御柱祭に参加し綱を曳いて頂きました。今回は静岡県浜松市と飯田市南信濃の境にある兵越（ヒョウゴエ）峠で毎年開催されている「峠の国盗り綱引き合戦」の観戦とその前座で行われる一般の部の綱引きに参加して頂きました。

今回も主賓の篠邊三郎名誉教授を迎え、愛知県4名、静岡県9名、長野県5名の総勢19名の参加となりました。日程は次のとおりです。

平成28年10月22日（土）

飯田市天竜峡集合→天竜川を舟で下る（天竜峡～唐笠）→秘境駅で知られるJR飯田線に乗車→川本喜八郎人形美術館鑑賞（NHK三国志の人形他）→飯田市上村（急傾斜地の集落で日本のチロルと呼ばれる“下栗”展望）→飯田市南信濃「いろいろの宿 島畑」（ジビエ料理で懇親会）

平成28年10月23日（日）

飯田市南信濃「峠の国盗り綱引き合戦」観戦→飯田市上村「中央構造線ジオパーク：中郷流宮岩見学」・昼食：遠山ジンギス（解散）



南信州の秘境をコンセプトに信州の良さを体感して頂きながら、秋の夜長にいろいろを囲んで楽しんで頂きました。

なお、本年の大河ドラマ「おんな城主直虎」は峠の綱引きの会場ともなっている静岡県浜松市が舞台ですが、直虎のいなずけの亀之丞（井伊直親）は、今川氏から逃れ1545年～1555年までの10年余を長野県下伊那郡高森町の松源寺で過ごしており、「真田丸」に続く大河ゆかりの地として、地元の高森町は観光に力を入れております。是非とも南信州にも足を運んで頂ければ幸いに存じます。

篠邊先生の魅力により、弘前から遠く離れた三遠南信の地で会員が結束し、このような会が継続していることに、心から感謝申し上げます。

（平成2年3月農業工学科 造工・施設学教室卒業
八幡秀彦）



「弘翔会」松島会（第9回）を開催

平成28年6月1～2日、宮城県松島町松島温泉において、北海道、東北・関東各県から18名が参加して弘大農学部昭和43年卒同期会の「弘翔会」を開催したので、これまでの歩みとともにご紹介させていただきます。

この会は、昭和39年入学生と43年卒業生を会員とする同期会で、卒業後10周年の節目に同期相集い旧交を温めようとの提案があって、第1回目を開催し、次回からは恩師のご参加も得て20周年、その後5年間隔で開催してきました。

- ① 10周年 昭和53年10月
弘前市 寒沢町温泉 20名
- ② 20周年 昭和63年10月
弘前市岩木町 百沢温泉 23名
田辺良則学部長、森敏夫教授
同年12月森教授により、この会を「弘翔会」と命名されたことを記念し、弘前・黒石在住の有志6名が入魂の集いを開催。
- ③ 25周年 平成5年10月
青森市 浅虫温泉 23名
菊池卓郎学部長、望月武雄・佐々木信介・正木進三各名誉教授・豊川好司教授
- ④ 30周年 平成10年11月
弘前市岩木町 百沢温泉 19名
豊川学部長、佐々木・田辺・正木名誉教授
- ⑤ 35周年 平成15年10月
弘前市岩木町 百沢温泉 18名
佐々木・田辺名誉教授



この後、会員の定年を契機に北海道、東北各県持回りで2年ごとに開催。

- ⑥ 平成22年5月 福島市飯坂温泉 13名
 - ⑦ 平成24年6月 札幌市すすきの温泉 18名
 - ⑧ 平成26年6月 秋田県鹿角市大湯温泉 18名
- このように定期的に開催し、9回目を数えることになりました。

今回は1日目に松島町ホテル大松荘に集合し、記念撮影、懇親会の開会宣言・故人への黙とうの後に、それぞれの近況を報告しながら美酒を酌み交わし、思い出話に花を咲かせ、夜の更けるまで懇親を深めました。

2日目は、近くの国宝瑞巖寺に出かけました。東日本大震災の津波による塩害で、総門からの参道の樹齢100～400年の杉木立が300本以上伐採されたほか、依然として枯死が続き、地表のコケも消滅しているが、松島湾の島々が津波の勢いを弱めたことでこの程度で収まっているとのガイドの説明に納得しながらも、盛んに進められていた抜根や土の入れ替えなど参道の再生工事によって以前のようなうっそうとした杉木立が再現されるまでの時の長さに想いを馳せていました。

この後、瑞巖寺本堂や美しい庭園の円通院等を拝観後、観光船を貸し切って津波の被害軽減に寄与した松島湾内を一周して2日間にわたる会を締めくくり、心身のリフレッシュを感じながら2年後青森県での元気な再会を約束して散会しました。

(宮城県幹事 千葉 亨)

